

FOCUS UP ①

白石雅俊NBF理事長に聞く、コロナ禍に見舞われた現在と近未来への“思い”



NBF(日本ボウラーズ連盟)の白石雅俊理事長が、日本ボウリング黎明期の若かりしころにトップボウラーであったことは、つとに有名な話。89歳を過ぎた今も週1回、自宅近くのセンターで開催されるNBFのダブルスリーグに参加して元気に投げ続けている。「昔も今も、どんな立場の人に対しても、ボクはいちボウラーとして向き合ってきた」という“日本ボウリング史の生き証人”に、コロナ禍に見舞われた現在と近未来への“思い”を聞いた。(6月19日取材)

2月27日にリーグで投げたのを最後に、100日近くボウリングをすることができませんでした。こんなにも長い期間投げなかったのは、我がボウリング人生初めてのことで(苦笑)。ボウリング場(ラウンドワン

南砂店)の営業が再開されてからは、通常ならリーグのある月曜日に、一人で投げに行っています。リーグの再開は7月からですが、そのときまでに(3G)500以上は打てるようにしておきたいですから(笑)。普段一人のときは1時間くら

い投げなのですが、久しぶりなので最初は30分でやめました。それでも2日後くらいに太股のあたりが筋肉痛に(苦笑)。なので、次に行ったときは15分、その次も15分。毎週投げたときは何ともなかったのに、長いブランクがあるとこんなふうになるんですね。やはりボウリングは週に1、2回コンスタントに続けているのがいちばん健康的で、カラダのためにもいいのでしょう。

しかし、プロボウリングに大きなスポンサーが付いた話題のトーナメントが増えたり、JBO(日本ボウリング機構)という組織ができて、業界全体が一丸となって盛り上がってきた矢先に、コロナのせいでこんな状況になってしまったのは本当に残念。NBFは再来年に創立50周年を迎えるので、遅くともそれまでには事態が終息してほしいと願っています。

本来なら今年は東京オリンピックの年。NBFは2年前から準備をして、従来の大会スケジュールを作り変えていたのですが、オリンピックの1年延期が

決まって、また来年のスケジュールを練り直さないといけなくなりました(苦笑)。

ボク個人としては、全日本選手権のほか東西の選手権とオーバー70ダブルスはぜひとも開催したいと思っています。大会がないと会員ボウラーのモチベーションも上がらないでしょ



▲今年1月に開催された「米寿を祝う会」にはJBCの北川篤会長(右)も祝福に駆けつけた(1月19日、東京ポートボウル)

うし、とくに高齢の会員さんは、今みたいに投げられない状況が長く続くと、ボウリングを続けようという気持ち自体が薄れてしまうのではないかと心配だからです。

JBO立ち上げのとき、他団体のみなさんがボクに気を使って、「相談役

筆頭理事」という肩書きで迎え入れてくれました。長い間確執のあったJBC(公益財団法人全日本ボウリング協会)とも交流できるようになったのはうれしいことですが、ボクはもう89歳で欲も何もなし、裏でお手伝いするだけでいい。これからはもっと若い人たちが先頭に立って、ボウリング界を引っ張ってほしいと思っています。

以前にも話したと思いますが、業界の中だけでコトを済ませようとしてはダメ。トーナメントにはだれもが知っている大きなスポンサーが付いてこそ世間の注目も集まるし、ボク自身がそうだったように、他業種の人たちと積極的に交流することで視野も人脈も広がっていくのですから。

今はコロナから家族を、ボウラーを守ることが最優先の課題ですが、ボク自身マイナス思考に陥らないように気をつけて、また大勢の仲間と再会できる日を楽しみに、頑張って生きていこうと思います。

FOCUS UP ②

4度目のプロテスト挑戦はコロナ禍で消滅。“アイドルボウラー”熊本美和さんは、今…



今年度、日本ボウリング場協会から“ボウリング大使”に任命された熊本美和さんは、アイドルユニット「バクステ外神田一丁目(=いっちょめ。以下『バクステ』と表記)で活躍するタレント。目指しているのはアイドル“プロ”ボウラーだ。

メンバーの名前も知りませんでしたから(苦笑)。

バクステは、普段はカフェのアルバイト店員(アイドルキャスト)として働きながら、店内の常設ステー

ジで歌や踊りを披露するのが基本。CDを出したり、店外で芸能活動をするメンバーは、来店客やファンの人気投票によって選ばれる。

入店当初、歌やダンスが未経験だった美和さんはレッスンに付いていけず、一度ボウリングを中断して猛特訓。生来の負けん気と運動神経のよさも相まって他のメンバーに追いついたとき「それまで知らなかった世界の楽しさを感じた」という。

数年経って本格的にボウリングを再開したのは「ボウリング好きのアイドルをアピールしながら、ハイスコア267点がまったく更新されないことをファンに指摘されたから(苦笑)」だそうだ。バクステには殿堂(レジェンド・アイドルキ

ャスト)入りというシステムがあり、美和さんもその一人。そのさい「ハイスコアを更新する」という課題が出された。並行して挑戦の過程を追跡したドキュメント作品が制作されたが、長いブランクのせい、半年経ってもハイスコアは更新できずじまい。それでもボウリング自体は以前のレベルに戻り、美和さんは改めてボウリングの楽しさに気付いたという。

「次に目指したのがP★リーガーで、そのためにはプロにならなきゃと思った」と、4年前から資格取得テストへの挑戦を開始。その壁は分厚く、過去3回はいずれも1次で撃沈したが、去年は合格ラインまであと48ピンという“惜敗”だった。

しかし、3度目ならぬ“4度目の正直”を期した今年は、まさかのコロナ禍でテスト自体が中止に。美和さんは落胆した。

プロの夢は諦めない

P★リーガーの夢は2年前、番組企画の「第3回次世代P★リーガー発掘プロジェクト」に

合格して実現した。ちなみに、同プロジェクトの合格者6人の中には、一足先にプロ入りを果たした岡田友貴(51期)と小沼姫(52期)がいる。

P★Leagueデビューの直前には、JPBA「2018レディース新人戦」のアマの部に出場してTV決勝に進出し、準優勝。同年には、ラウンドワン府中本町店で開催された小林よしみプロ(43期)のチャレンジマッチで初のパーフェクトゲームを達成し、念願の自己ベスト(ハイスコア)更新も果たした。

だからこそ、残る「プロのライセンス」の夢も諦めたくはない。美和さんは「来年もしテストが開催されれば受けた」と迷いなく口にする。

「よく『プロになったらアイドル辞めちゃうの?』って聞かれるんですけど、私は両方全力で頑張りたいと思っています。P★リーガーになってから、都内ではチャレンジの仕事もさせてもらえるようになってファンも増えたり、カフェのお客さんがチャレンジに来てくれたりもする。だからプロになっているいろいろな地方を回って、バクステの知名度も上げていきたいと思うんです」

バクステの岡村則明プロデューサーも「自分で決めたことはちゃんとやる意志の強い子

ファンの人とも両方頑張っている彼女を応援している」と“二刀流”を支持する。

ボウリング大使の肩書きも、コロナ禍でほとんど活動ができていない現状のまま手放したくないと思っている。

「任期2年とかにならないですかね? 大使のときにプロになれたら、めっちゃカッコいいとも思うし(笑)」

その意気やよし。前途の幸運を祈るばかりだ。



▲18年の女子新人戦アマの部で準優勝。初体験のTV決勝に「人生で一番緊張したかも」と苦笑(7月29日、ボウリング王国スポーツ八景店)

くまもと・みわ/1993年5月10日生まれ、島根県出身。155センチ、右投げ。血液型B。AKIHABARAバックステージpass1期生。P★リーガー。2020年度ボウリング大使。